

## 授業公開：幼児教育実践論

幼児教育・青井倫子

### 1. 「幼児教育実践論」（3回生前期）の概要

本授業は、幼年教育専修の専修科目であると同時に、幼稚園教諭一種免許状取得のための必修科目である。

幼児教育教室の教員（青井、深田先生）と附属幼稚園教員で担当しており、全15回の授業構成は、ガイダンス1回（深田先生担当）、保育参画の事前指導1回（青井担当）、保育参画5回（青井、深田先生、附属幼稚園教員で担当）とその研究協議5回（青井、深田先生、附属幼稚園教員で担当）、事例発表会3回（青井、深田先生で担当）から成る。

5回の保育参画は、1回目は3～5歳全般、2回目が5歳児、3回目が4歳児、4回目が3歳児、5回目は学生の希望により各年齢に分かれて実施している。また、保育参画と研究協議は同じ日（保育参画を1限目、研究協議を4限目）に行い、研究協議にはその日に参画したクラスの担任幼稚園教員も参加している。

### 2. 受講学生

【大学院生：1名】音楽教育1名

【4回生：8名】教育心理1名、体育教育2名、障害児教育5名

【3回生：14名】教育学3名、教育心理1名、幼年教育7名、家政教育2名、数学教育1名

### 3. 6月20日の授業公開

授業公開は、同じ日の1限に行われた4歳児2クラスの「保育参画」についての「研究協議」（4限）で行った。

<保育参画> 1限の保育参画では、附属幼稚園教員からその日の保育案（保育のねらい、最近の幼児の様子、環境構成、予想される子どもの姿、教師の働きかけのポイントが記載されている）が学生全員に配付される。学生

は保育案に目を通したうえで保育参画を行う。

この日の4歳児の保育における「保育のねらい」は「自分の好きな遊びを試したり、教師や友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わったりする」であった。

<研究協議>

研究協議は、大学教員（この日は青井担当）の司会進行により進められた。

まず、前の週までに3～5歳全般と5歳児の保育参画・研究協議を実施済みなので、そのことに触れて、年齢による発達の様相の違いに意識が向くように促した。

次に、本時のねらいを確認させたうえで、幼稚園の担任教員2名から、ねらい設定の背景や意図、雨天だったことにより普段の姿との違いがあったのかどうか、また4歳児クラスは新入園児と進級園児が混在していることなどを含めて、4歳児の姿、最近の様子、今日の様子などについて、その概要についてお話をいただいた。

引き続き行う学生によるディスカッションは、討論したいことのある学生が挙手をして保育参画での体験事例を発表し、問題提起をしたうえで、他の学生たちと意見交換を行うという形ですすめた。

授業者（青井）は、学生により紹介された事例の内容を確認したうえで、議論のポイントを示した。

議論の過程では、随時議論に必要な情報や視点を提示、確認して、議論が逸れないようにするとともに、学生の思考や発言を促すように努めた。学生の主体的な発言のなかで課題解決の糸口が発見できるように最大限努めながら、発言が滞った場合には、保育参画中の学生たちの様子を思い出し、指名して議論の参考になりそうな体験の紹介をするように促したり、青井自身がその日の保育参画において体験した事例を紹介したりするなどした。

議論は、保育のねらいを分割して、①「自分の好きな遊びを試すために必要なこと」は何か、「試す」ということをどう捉えるか、②「教師や友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わう」ことについて4歳児の場合「教師との遊び」と「友だちとの遊び」の楽しさの違いは何か、③「好きな遊びと友だちとのかかわりの関連」の3点について順に議論をすすめた。

うまくいった事例が紹介された場合には、うまくいった要因をおさえ、逆に失敗事例の紹介の場合には、なぜうまくいかなかったのか、どうすればよいのかなどについて、「発達」「個人差」「信頼関係」「環境構成」などいくつかの観点から「必要なかかわり」について検討できるように促した。

授業者（青井）は議論の過程において随時コメントをし、附属幼稚園の先生方には、議論の過程において事例検討に必要な幼児についての情報をいただいたり、授業時間の最後に5～10分程度、全体を通しての気づきや助言をいただいたりした。

#### 4. 授業公開とカンファレンス

##### <参加者>

指定参加者：深田昭三 先生（教室内）

授業公開・カンファレンス参加者：

渡邊重義 先生（理科教育）

近江理恵 先生、松浦道子 先生

（附属幼稚園）

##### <カンファレンス>

授業者（青井）：授業公開に設定した理由

「幼児教育実践論」は、学生が実際に保育に参画し、それをもとに研究協議を行う点、また、大学教員（幼児教育、幼児心理）と附属幼稚園教員が協同で、理論と実践の両面から指導を行うという点において、たいへん特色ある授業である。しかしながら、幼稚園で保育に参画すること自体が初めての学生が大半を占めるなか、限られた時間（全体1回、3、4、5歳児を各1回、希望年齢1回の参画と研究協議）で、「実践力」を養うためには、まだまだ改善の余地があるのではないかと考えている。

渡邊先生のご発言（要旨）：

・授業の内容について：他の多くの授業では、授業（保育）の「参観」はしても、実際に授業（保育）に入って自ら授業（保育）者

になって子どもとかかわる「参画」は少ない（と思われる）。この授業では、午前中の参画体験をもとに自ら体験した事例をベースにしたディスカッションができる点が良い。

・学生の様子について：日頃から、意見が出にくいことが教育学部学生の課題と感じているが、この授業においても、他の学生や教員の発言のノートテイクに必死で、学生たちの発言は「非常に積極的」とは言えず、学生たちがもっと自分の「わからなさ」を積極的に出したらよいのにと感じた。

一方で、初等理科教育法など教育学部生が全員必修で履修する授業とくらべ、「幼稚園免許」（しかも1種免許）の取得を希望する学生のみ受講であるため、その受講態度から、授業へのモチベーションが非常に高い学生が集まっていると感じ、そのことをたいへん羨ましく思った。

授業展開について：（比較的保育現場に通じている）青井の保育実践に関する知識がポイントになっていると感じた。今後、教育学部では、この種の授業（実践的授業）が増えていくことが予想されるが、教員側の指導力が課題となるだろう。

注）渡邊先生は、以前別の日に、この授業の保育参画（1限）も参観されている。

深田先生のご発言：毎年、5回の参画と研究協議を通して、次第に学生の変容が見られる。研究協議では、学生の発言をいかに掘り下げた議論に結びつけるのかがなかなか難しく、教員側も相当に緊張を強いられる。

注）深田先生は、この授業の共同担当者。

近江先生、松浦先生のご発言：この授業の研究協議は、大学教員が学生に指導をする内容を聞くことや、学生たちのディスカッションを聞くことで、自分たちも刺激を多く受けることができるし、また勉強にもなっている。保育中に自分が目にできなかった子どもの様子を知ることができることも有難い。

注）近江先生、松浦先生は、この授業の共同担当者。

天候の悪いなか、授業公開とカンファレンスにご参加くださり、貴重なご意見をいただきました渡邊重義先生と深田昭三先生に感謝いたします。